

# 茶の湯文化学会会報 No.4

第4号 / 1994年12月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314

## 出羽遊心館

茶の湯をはじめ生花、舞踊、邦楽、歌、俳句、詩吟など、市民の間で嗜まれている伝統的な芸能の研修や催しを目的とした珍しい施設が、山形県の酒田市で企画建設され、十月三日完成した。和風文化会館と仮称されていたが、市民からの公募により、「出羽遊心館」と命名された。

市街の南、最上川を隔てた飯森山の台地、土門記念館と道を挟んで相對する辺りに位置している。南から西へ松林が広がり、東方は眺望をほしいままにし、左に鳥海山、右に月山を望むことが出来る。敷地は一万五千平米、北に駐車場を設け、中央に東西に長く連なる建築物を配して庭をめぐらしている。

西側の新設道路に面して正門を開く。玄関を入ると右手に事務室があり、左へ進むとホールである。ホー



出羽遊心館全景

ルは間口五間、奥行九間の広さで板敷である。両側は中に張出して広い濡縁が設けられている。ここは多目的な室であるが立札席にも使われる。正面に床と点前座が設置されていて、客は腰掛けて座札の点前を拝見しながらお茶を飲むこともできる。ここで花展も催しうるよう近くに準備室がおかれている。玄関棟から東へ研修棟が続く。五十二畳敷に二十四畳敷の次の間が付き、空間の伸縮を可能にする。正面に舞台が設けられ、舞踊や音曲に使われる。初の催しは琵琶の会で、音響の効果がとてもよかったという。

研修棟の南側には広々と芝生の庭が広がり中央あたりの築山は造成以前の地形を生かしたもので、その桜も既存の樹であった。東端の広間棟は広間の茶室を主とし、それに寄付と

水屋を配し三方に畳縁をめぐらして、北西に玄関を付加する。茶室は十四畳敷、床、付書院、地袋をそなえ、天井は小丸太の格天井でゆったりとした落ちつきを感じさせる。畳縁の外には広い濡縁が設けられ、下を遣水が流れる。ここからの眺めが素晴らしい。観月の茶会の風情が偲ばれる。

南側の畳縁をおりと砂利敷の庭で、高塀を隔てて露地があり、茶室(小間)が北向に建てられている。茶室は四畳台目、六畳敷の勝手水屋に厨房もついている。この水屋と広間棟は長い渡廊がつながれており、渡廊が強い西風から露地を守っているようだ。

大小の間取りと高低のある屋根が屈折しながら連なる建物の姿は、どこまでもおだやかで和かさを漂わせる。全体で千二百三十平米なのに、大きさも高さも感じさせないたたずまいである。

酒田市ではこの施設に、前述の利用目的以外の意図を託していた。一つはこれを木造で建設することを通じて、木造建築の伝統的技術の振興と、木の文化への理解を深めたいということであった。もう一つは、建物と庭が形づくるとこの施設のたたずまいを通じて、日本らしき、伝統文化の魅力を訪れる人々に喚

起したいということであったという。庭の周囲に廻遊路がめぐらされているのは、そのためであった。開園らしい連日來園者が絶えないそうである。板垣館長は予想以上の反響に今後の管理運営に頭を悩ませている、と嬉しい悲鳴を挙げておられた。

平成六年度茶の湯文化学会の大会・総会が十月二十九日(土)午前十時より、約二百名の参加を得て「ホリデイ・イン京都」において行われた。

総会は筒井紘一氏の司会で始められ、中村昌生会長の挨拶の後、議長として林屋慶三氏副議長に倉沢洋氏が出され、議事に入った。

まず熊倉功夫理事から平成五年度事業報告がなされ、平成六年度総会直前によく刊行の運びとなった会誌第一号は平成五年度の事業である旨、説明があった。

次に赤沼多佳理事より平成五年度決算報告があり、収支決算、資産明細、貸借対照表の説明ののち、赤井達郎監事より適正であるとの監査報告があった。

理事会がホリデイ・イン京都「比較の間」において行われた。中村昌生会長以下十八名が出席し、総会議案の平成五年度会計報告及び監査報告、平成六年度予算案、平成五年度事業報告、平成六年度事業案について審議した。

大会における研究報告は、午前中に「茶の湯資料としての宝積寺絵図」「茶席挿花集について」「抹茶習俗の変容について」「茶の本心と本覚思想について」の四報告。

昼食・休憩・総会をはさんで、午後三時から「狂言本に見る茶の表出」「備中・備前・備後の茶人」「長板の台子起源説について」のテーマで報告があり、絵画資料、茶花研究、民俗、地域史など茶の湯を構成する多方面からの報告が行われた。

午後五時から長年、中国茶史・『茶経』研究に携わってこられた大阪大学名誉教授の布目潮瀧氏による記念講演。おりから京都文化博物館で開催中の「大唐長安展」にちなんで「唐代の茶器―大唐長安展によせて―」をテーマに、中国・西安市の西方にある法門寺から出土した茶道具を茶経と対比するなかで、

### 平成六年度総会報告

喫茶の展開および儀礼性についての講演であった。

続いて、午後六時から約百名が参加して懇親会が行われ、成功裏に大会は終了した。記念講演要旨

「唐代の茶器―大唐長安展によせて―」

中国唐代、陸羽によって著された『茶経』の「四之器」には、二十四の茶道具が挙げられている。これとも関連する茶道具が、一九八七年に中国西安市(唐代の長安)の西にある法門寺地宮から発見された。同時に出土した「監送真身便隨身供養道具及金銀宝器衣物帳」で名前を知ることができ、かつ、唐室で使用された事がわかる貴重な発見であった。



続いて平成六年度の事業案並びに予算案が熊倉、赤沼両理事より提出された。

以上が予定された議案であったが、戸田勝久理事から、当学会の設立にご尽力いただいた十二名の方を名誉会員に推挙したい、との提案があった。十二名は次の通り。梅原猛、太田博太郎、数江教一、永島福太郎、西山松之助、芳賀幸四郎、林屋辰三郎、平田精耕、古田紹欽、細川護貞、源 豊宗、山根有三(五十音順、敬称略)

以上の議案はすべて満場一致で承認され、閉会となった。

### 平成六年度総会第二回理事會報告

平成六年度総会に先だって、本年度第二回



さて、『茶経』は十部からなる茶の百科事典ともいえるものだけに、最近では中国でも『茶経』研究が行われるようになり、論考も出版されるようになった。しかし、それらと少し解釈の異なる部分もある。例えば、「為飲最宜精行儉徳之人」を「最宜」で切り、「精行儉徳之人」と読んでいたようだが、私は続けて読んでいた方がよいと考えている。

この「四之器」の記載の内、法門寺からは「碾」「羅合」「則」「盃」などにあたるものが出土しており、今回、京都文化博物館の「大唐長安展」にも出品されている。これらの茶器を『茶経』の茶道具と比較するならば、「黄金」と「わび」といってもよいであろう。

では、法門寺の茶道具はもともとどこに置かれていたのであるか。すべてが一セットだと考えられるのであるが、それは宮廷内の内道場であったであろう。唐代の内道場についての研究は少ないが、『冊府元龜』などから内道場である事を考えてもよい。

次に飲茶の儀礼について述べてみたい。よく知られる文献だが、『封氏聞見記』には開元年中(七二三―七四一年)に坐禅の合間に茶を飲んだ記載がある。その他『太平廣記』にも茶会の記録があるが、まだ儀礼的とはいえず

ない。

しかし、崇寧二年（一一〇三年）序の『菀清規』には儀礼的な飲茶の様子が書かれている。この事から考えて、喫茶は中国で儀礼化をへて、禪宗と共に日本に伝わったのであろうと思われる。すなわち禪院での茶が「茶道」を生む原型になっているのである。

芸術と宗教や茶礼と清規の関係についてはすでにハリソンや西田幾多郎、今枝愛真氏らの研究があるが、仏教と茶の関係について儀礼という視点で今一度考える必要があるだろう。

「茶禅一味」という言葉もあるが、それは必ずしも精神的な意味ばかりでとらえるのではなく、茶道の儀礼的な側面を示すものとして、より注目すべきであろう。

#### 大会発表要旨

##### 発表1

茶の湯資料として見た宝積寺絵図

原田三壽

京都府乙訓郡大山崎町に所在する宝積寺は、織田信長没後の天下の行方を決めた羽柴秀吉と明智光秀の山崎の合戦で有名な天王山の中腹にあり、「宝積寺絵図」と呼ばれる絵図が伝

えられている。

絵図では宝積寺の周辺に、大山崎にゆかりのある人物やエピソードである「宗鑑やしき」「利休」「天神腰かけ石」等を描きちりばめ、中心に描く宝積寺を相対的に高めるといふ制作動機の一つを垣間見る事ができる。描かれた建物の中で「利休」「妙喜庵」はまだしも、「宗鑑やしき」に至っては、制作時に存在していた可能性は低い。これらを一緒に描いているところに、往時は首都であったこと、その文化的環境を誇りにしていることが感じられるのである。

またこの絵図にある、「利休」「妙喜庵」「かこひ」「袖すり松」は当時の最高権力者秀吉と利休ら文化人を偲ぶものであり、この絵図は歴史事象としていわれてきたことを視覚的にも確認しうる資料として価値がある。

##### 発表2

『茶席挿花集』について

横内 茂

文政七年（一八二四）三月、『茶席挿花集』（以下「挿花集」という）と題する小型本（タテ一〇・五cm×ヨコ二〇・〇cm、茶色表紙、二十六丁うち六丁が図版）が出版された。版元は、江戸日本橋の須原屋である。原著

者は柿園、芳亭野人編、漢名の校訂ならびに植物画は岩崎灌園という顔触れであった。

『挿花集』では、年間の代表的な茶花植物約三百六十種が十八丁にわたり月別に列記されている。このリストにより、外来植物、園芸植物の非常に多い点が注目される。外来植物が、全リストの約三十五%にもおよんでいる。末尾六丁の植物画八十九種は当時の茶席ではあまり見られない希少植物であった。こうした栽培下にある多くの植物が茶花に持ち込まれた背景の一つには、当時の江戸における園芸ブームと、園芸植物の一大生産地染井村の存在があったように考えられる。

本書は、純粋な茶花ガイド、茶花図鑑としての性格が強いが、茶道文化に果した意義は大きいものがある。

##### 発表3

抹茶習俗の変容について（予報）

―尾張津島地方の事例―

松下 智

愛知県西部、尾張の津島市を中心とする、町村一帯における抹茶習俗は、まさに、日常茶飯そのものであり、朝昼晩の三度は勿論のこと、十時と三時、それに、来客ともあれば、『先ずお茶を』と抹茶の一服が出される。し

たがって茶席は、各家庭の縁ばなであり、居間であれ、応接間であれ、その時の来客に応じて設定される。こうした抹茶の習俗もあって、茶室も多く、古くから栄えた、津島市の「町衆」といわれる所には、一軒の家で、茶室を二―三室もっている家もあり、農村部に於いても、旧家といわれるところには、茶室もあり、なかには、二室をもつ家もある。

こうした抹茶の習俗も、昭和三〇年頃を境に徐々に消失しつつあり、現在では、何処へ行っても高年層に見られるだけで、若年層には極めて少なくなっている。さらには、抹茶の習俗がコーヒーに変っており、名古屋を中心とする都市化、農業技術の進歩発展、それに社会生活の変容等々があつて、大きく変わりつつある。

##### 発表4

「茶の本心」と本覚思想について

三崎義泉

藤原俊成は『古来風林抄』において、「人の心をたねとする」和歌においては、事ごとに空仮中三諦を悟るような「もとの心」に行きつかねばならない、と述べた。人は本来具有する覚性に到達してこそ真実を生き美を究めうる、というわけである。これは明らかに、

天台本覚論の「歌人としての」実践である。定家以後には「もとの心」「もとの覚り」は歌語としても多出した。頼阿・正徹・心敬・宗祇らも、世阿弥・禅竹も、究めようとしたことは「本心」への到達であった。それらを顧みるとき、利休の説く「茶の本心」（南方録）は、「もとの心」と解してもよいほどである。

「侘び茶」とは、孤絶した命の普遍的であることを敬慕いあう一座建立である。このような個々のものみなすべてが本来帰一すべき真如の実相を究めるのが本覚思想である。茶の湯とは、ものの心、時の心、人の心、おのが心を尊ぶものと知る人は多いが、さらに、さまざまな心の「本」となる究極位の「本心」にまで到達せねばならない。

##### 発表5

狂言本に見る茶の表出

福良弘一郎

能は、世阿弥によりその芸風を完成し、生死をかける武家社会の精神的指向の中で愛好者を増やしていった。一方、世相の風刺を主題にした狂言は、一般大衆を包み込んだ芸能として広まり、猿楽の能、狂言として交互に舞台で演じられた。

茶は、「茶西が」「喫茶養生記」とともに抹茶

を日本に伝えて以来、室町時代後期には、一般大衆の中で普及し、その風俗は様々な文献に登場する。

室町時代になって展開する茶の普及と狂言の相互の関係については、狂言本を基に演目、流派別等から、共通性や分布状況がどのように茶との関係を示しているのかについて、具体的な内容を中心に傾向を見なければならぬ。

狂言の演目は大まかに三つの芸態があるが、本狂言と言われる芸態のものに茶の湯に関する表現が多く見られるところから、主に本狂言と考えられる演目を中心に、そこに登場する人物や事項について、茶との相関や表現のされかた、傾向や道具等の表記のされ方について今後も検討を続けたい。

##### 発表6

備中・備前・備後の茶人たち

井上秀二

備前・備中・備後の茶人としては岡山藩家老伊木三猿齋が知られているものの、商人たちについては未だに発表されたものがない。それゆえ、幕末期に活躍した備中・備前・備後の茶人たちを紹介してみたい。

まず、豪商の茶人として備中玉島の萱谷十

郎がいる。萱谷家は江戸中期から廻船問屋を営み、持船で全国各地と取引を行っていた。半十郎は藪内流の門人で、藪内家八世竹猗・竹鳳・十世竹翠との書簡も三十通ある。

今ひとりの豪商茶人に三宅米翁がいる。かれは廻船問屋を営み、藪内流の門人として家元を支援した。これら二茶人には「皆伝」が送られ、燕庵での茶事に招かれてもいる。

備前岡山の国富源次郎は銭屋・魚問屋を営み、幕末には「財力岡山」とも謳われた。かれは速水流に属し、宗達以来の門人と思われる。備後尾道の豪商橋本吉兵衛は回漕・塩業・金貸業を営む、藪内流の門人である。かれを中心に幕末の尾道で茶の湯の盛んであったことが、その茶事録から知られうる。

発表7

長板の台子起源説について

神津朝夫

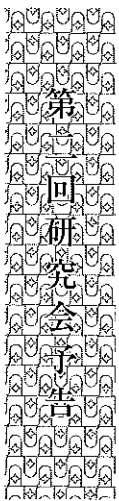
長板は台子の地板（一説では天板）から作られた、台子を略したものであると一般にいわれており、これはその形状や用途をみると一見何のうたがいないかのように思われる。しかし私は、この長板の台子起源説に疑問をもつものである。

十六世紀の絵画資料「酒飯論絵巻」や「お

よりのあま絵巻」には朱塗や木地の長板が描かれており、またその置かれている場所は茶の湯の点前座ではない。これらの絵巻には台子も真塗の長板も描かれておらず、こうした朱塗や木地の長板が台子から派生したとは考えにくい。

また天文年間の茶会記を検討してみても、台子と長板で使われる道具に違いは認められず、台子と格に差をつけるものとして長板が作られたとは考えられない。

江戸時代になり台子点前の体系化と同時に台子を頂点とする茶の湯の点前全体の体系化が行われ、長板は台子より派生して天板がなされたため台子に準じる格をもつもの、と位置づけられたと考えられるのである。



第九回研究会報告

研究の進展を目指す第二回研究会を左記の通り開催します。

日 時 平成七年二月十二日（日）

午後一時三十分～五時

会 場 京大会館

特別講演 南京農業大学教授

朱自振氏「中国の茶道」（交渉中）

研究発表 谷端昭夫氏

「井伊直弼の茶会記について」

会 費 無料（非会員は五百円）

発表者の募集

大会・研究会における発表者を募集しています。大会は一題につき報告二十分、質疑応答十分、研究会は同六十分・三十分程度です。発表を希望される方がありましたら、事務局までご連絡下さい。

応募される方は八百字程度の梗概と研究会・大会応募の別を明記して事務局へ提出して下さい。

事務局報告

\*会報は、はやくも第四号となりました。これまでは報告記事を主体としてまいりましたが、今後はできるだけ会員の皆さんの意見交換の場としたいと考えておりますので、ふるって投稿くださいますようお願いいたします。

\*会誌第二号は三月末までに、会報第五号は四月頃発行の予定です。